

県文化懇話会賞に中村さん

新人賞は坂本さん、野口さん

と小説家の野口美柑さん(50)「いずれも同市」に贈ると発表した。

崇城大芸術学部美術科教授の中村さんは、熊本の日本画壇の第一人者。多くの展覧会で入賞、入選を重ねている。神社仏閣の絵馬や天井画など文化財の修復作業にも携わる。2000年に同大の助教授に就任し、後進の指導を続けている点も高く評価された。

坂本さんは、尚綱大短期大学部幼児教育学科教授。昨年あった白日会創立100周年記念展の彫刻部門で、最高賞の吉田三郎賞に輝いた。

野口さんは、第54回九州芸術祭文学賞の最優秀作を、県内在住者として7年ぶりに受賞。各種文学賞への応募など精力的に執筆を続ける。

主に昨年1年間、芸術分野で活躍した県内在住の個人が対象。同会世話人らの推薦を基に、選考委員8人が決めた。

県文化協会は、昨年の第66回県芸術文化祭の奨励賞を発表。「熊本演劇人協議会」「小泉八雲没後120周年記念事業実行委員会」「オハイエくまもと15周年

熊本県文化懇話会は8日、第60回県文化懇話会賞を、日本画家の中村賢次さん(62)「熊本市、同新人賞」を彫刻家の坂本健さん(48)

第60回県文化懇話会賞を受賞した日本画家

なかむら けんじ
中村 賢次さん

熊本に帰って25年、熊本の風景を描くようになって10年。節目の受賞に「とてもありがたいです」とほほ笑む。

幼少期は体が弱く、家で絵を描くのに熱中した。日本画との出会いは高校生の時。熊本高の美術教諭だった日本画家の姫野



ひと

豊さんが美術準備室に広げていた岩絵の具の美しさと、独特のマットな質感に「衝撃を受けた」。金沢美術工芸大へ進むも、周りは絵を専門的に勉強してきた学生ばかり。大学院を含めて6年間、ひたすら描くことで基礎になる技術力と表現力を磨いた。

京都で日本画家の故西山英雄さんに師事し、国重要文化財の修復にも携わった。崇城大芸術学部が創設された2000年に帰郷。後進育成のかたわら人物画や抽象画の制作を続けてきたが「モチーフに縛られないように」と、あえて熊本の風景を描くことはしなかった。

転機は15年の阿蘇中岳の噴火、そして16年の熊本地震と再び起きた阿蘇中岳の噴火だった。「人間の力ではどうすることもできない自然への『畏れ』が、熊本を描くことにつながった」

(ここ数年は大学の業務が忙しく、スケッチをする時間もなかなか取れない。それでも「描きたいもの、やりたいことがまだまだある。死ぬまで描き続けたい」と力を込める。一方で、制作と並行して進めてきた県内の神社の絵馬や天井画の修復活動は道半ばだと感じている。「熊本の文化を次世代につなげることを意識して、しっかり取り組んでいきたい」

崇城大芸術学部教授。日展特別会員。62歳。

(澤本麻里子)

記念コンサート実行委員会」の3団体が受賞した。

第9回子ども芸術文化未来賞には、球磨神楽など伝統芸能の継承活動を約20年続ける「湯前中」と、全国小学生バンドフェスティバルで金賞を受賞した「高平台なかよし合奏クラブ」を選んだ。

いずれも贈呈式は29日、熊本市中央区の熊本ホテルキャッスルである。

(井田真太郎)